

## 看護学部の学生および教員に対する防災教育

－防災セミナーと防災に対する意識調査－

林 和 枝、菊地 亜矢子、中川 名帆子、西村 淳子、近藤 裕子  
臼田 成之、谷口 恵美子

### Disaster Prevention Education for Nursing Students and Teachers

－ Implementation of the Survey and the Seminar for Disaster Prevention －

Kazue HAYASHI, Ayako KIKUCHI, Nahoko NAKAGAWA  
Junko NISHIMURA, Yuko KONDO, Nariyuki USUDA  
Emiko TANIGUCHI

キーワード：防災意識 防災教育 看護学生 看護教員

Key Words : Awareness of Disaster Prevention, Disaster Prevention Education, Nursing Students, Nursing Teachers

#### はじめに

1972年に設立された岐阜聖徳学園大学（以下、本学とする）は、2015年4月に羽島キャンパスに看護学部を開設し、初年次の学生を迎えた。看護学部は、新設の建物に設置され、新任教員の着任により、災害時における大学内や看護学部建物（以下、9号館とする）内での避難経路・避難場所や防災設備の設置状況、大学が所有している防災備蓄品の設置場所、備蓄品の種類や備蓄数、防災への取り組みや災害発生時の学生・教職員への対応などといった災害に関する具体的な対応や活動について、教員、学生ともに十分に把握しているとはいいがたい現状にある。

日本は地震大国であり、過去にも東日本大震災や阪神大震災など大きな地震が起きている。本学が位置する中部地方においては、東海地震発生の切迫性が指摘されている。また、本学羽島キャンパスは木曾川と長良川に挟まれた場所

に位置し、洪水による水害が多い地域である。

教員は、大学での活動において学生の安全を確保する責任がある。その責務をまっとうするためには、第一に教員自身が本学における災害時の取り組みや対応など具体的な内容を把握し、災害発生時に適切な行動をとることが求められる。これらは災害発生の際に教員ならびに学生が、自分の命と身を守り、安全に避難するために必要不可欠な事柄である。また、災害から身を守る方策や情報は教員のみでなく、学生自身も把握しておく必要がある。災害発生時に本学に所属している学生、教員一人ひとりが適切な対処行動を取ることにより、安全かつ速やかな避難が可能となるとともに、二次災害の防止につながる。

看護学生は将来、災害時の医療を担う中心的存在にもなり得る。災害時に傷病者の救援を行うためには、第一に医療従事者が自身の安全を守ることが必須である。学生が災害発生時の対

処を理解し、正しい行動がとれることに加え、専門職者としての意識向上をもたらす教育を初年次から行っていくことは、非常に意義が高いことであると考えます。

以上のことから、看護学部では防災関連ワーキングを立ち上げ、活動のひとつとして、学生と教員に対する防災教育のあり方を検討することとなった。初年次の活動として、学生と教員の防災に対する意識調査と防災に関するセミナー（以下、防災セミナーとする）を実施し、その教育効果を検討したので報告する。

## I. 方法

### 1. 対象

本学看護学部1年生62名（男性5名、女性57名）、および看護学部教員25名（男性5名、女性20名）

### 2. 実施時期

2015年7月

### 3. 実施内容

#### 1) 防災セミナーの実施

##### (1) 目的

災害に備え、学内防災施設・設備と災害時の自己の行動について理解できる。

##### (2) 目標

- ・学内における災害発生時の行動を理解できる。
- ・在校時の避難経路・避難場所を知ることができる。
- ・学内の防災施設・設備の位置を確認することができる。

##### (3) 実施内容と時間配分

#### 第1部：ショートレクチャー（15分）

地震・火災を想定した学内における災害発生時の基本的行動、大学との連絡の取り方（安否確認メールの受信設定方法および返信方法の説明）、家族との連絡の取り方（災害時掲示板の紹介）の3点について、パワーポイントを用いて講義を行った。

#### 第2部：ウォークラリー（55分）

ウォークラリーの目的は、学生と教員が災害に備え、学内防災施設・設備の位置や避難経路を理解できることである。そこで、学内の防災設備や避難経路などについて、学生と教員の記憶に残り、災害発生時に正しい行動がとれるよう、学生・教員自身の足で歩き、目で見、手で触って確認するという内容で実施した。

具体的な内容として、配付した学内マップに、9号館内の防災施設・設備（防火扉、消火器・消火栓、垂直式救助袋）および避難経路（非常出口の場所）、学内のAED設置場所（3ヶ所）、災害時集合場所の4点について、該当するシールを貼付し、自身の学内防災施設・設備マップを作成した。また、防火扉、消火器・消火栓については、扉の開閉方法の確認を削除、垂直式救助袋については、窓の開け方とキャビネット内の確認を行うよう指示した。

学内の混雑を避けるため、8グループ（学生8名、教員2～3名）に編成し、提示された順路で学内のウォークラリーを行った。

#### 第3部：まとめ・質疑応答（5分）

セミナー全体に関する質疑応答および学内の防災施設・設備の答え合わせと垂直式救助袋の使用手順の説明を行った。

#### その他（10分）

学生および教員の防災に対する意識と効果的な防災教育を検討するため、アンケート調査を実施した。調査説明書を配布、説明した後、質問紙を配付し、調査を実施した。

#### 2) 学生および教員の防災に対する意識と効果的な防災教育のための調査

##### (1) アンケート作成過程

防災意識に関する質問項目は、内閣府「防災に関する世論調査」（2013）と、上田ら（2013）の研究を参考にし、独自のものを作成した。防災セミナー受講の効果測定に関する項目は、独自のものを作成した。

##### (2) アンケート項目

調査項目は、性別、同居家族の有無などフェイスシートのほか、被災体験の有無とその内容、防災に対する知識、災害時の対応や通信方法の知識の有無など災害・防災に関連した項目を調査した。また、防災セミナーの受講効果を測定する項目と防災セミナー受講の感想・意見など自由に記述する欄を設けた。なお、調査は無記名式質問紙調査にて実施した。

### (3) アンケート分析方法

質問紙の各項目の回答を数値化し、SPSS version 23.0 を用いて単純集計を行った。防災セミナーに対する感想・意見などの自由記述については、防災関連ワーキング内で検討し、カテゴリー化した。

### (4) 安否確認メールのテスト配信

防災セミナー終了3日後に学生に対して、安否確認メールのテスト配信を行い、防災セミナーで説明した安否確認メールの受信設定および返信が正しく行えているかどうかを確認した。

## 4. 倫理的配慮

対象者に、研究目的、趣旨、方法、質問内容、協力者のプライバシーの保護、研究の参加・中止は任意であること、答えたくない質問には答えなくてよいこと、不参加により、不利益を被ることがないこと、成績には一切関連しないこと、結果を公表すること、回答に10分程度要することなどを明記した調査説明文を配付し、説明した。その後、質問紙を配付し、調査を実施した。

個人の特定がされないよう、回答した質問紙は、対象者自身が封筒に入れ、設置した回収箱に自由意思で投入した。調査の同意は、回収箱に投函したことによって同意を得たものとした。

なお、調査に先立ち所属大学の倫理審査会の承認を得て実施した(承認番号：2015-6)。

## II. 結果

防災セミナーには、学生61名(男性5名、女

性56名)、教員17名(男性3名、女性14名)が参加した。参加率は学生98.4%、教員68.0%であった。

質問紙回収者数は、学生61名(男性5名、女性56名)、教員10名(男性3名、女性7名)であった。質問紙回収率は、学生100%、教員58.8%(有効回答率：100%)であった。同居家族の有無については、家族と同居しているものが学生51名、教員10名、一人暮らしが学生10名、教員0名であった。

### 1. 防災セミナーの実施

今年度は、学生および教員が、自身で学内の施設・設備の確認を行うことで、防災に備えることができることを目的とし、ウォークラリーを実施した。多くの学生は、興味関心を持って積極的にウォークラリーを行っていた。しかし、防災セミナー当日が雨天であったため、9号館外であるAED設置場所(3ヶ所)や災害時集合場所の確認ができなかったグループがあり、第3部のまとめの時間に説明を行った。

個々のグループで教員や学生間で質問するなど、主体的に疑問を解決しながら、学内防災施設・設備マップを作成している学生もいた。参加者全員が情報を共有するためにも、個々のグループから挙げた質問や疑問などの学生の気づきをフィードバックするような時間を設け、周知することが必要であると考えた。また、事前に重要なポイントや学生から疑問が起こりうる内容を教員間で共有し、ウォークラリー時に実際の施設・設備の説明、あるいは質問に対する回答を行うといった、その場で疑問を解決していくという方法をとることも必要であると考えた。

今年度は、看護学部の建物を看護学部1年生が中心として使用しているため、実際の設備などを、学生や教員自身が歩きながら確認するといった方法をとることでできた。しかし、今後、学生数が増えることや他学部の学生が9号館内の施設を使用する頻度が増えることを鑑みると、今回と同様の方法をとることは他学生の学

習や授業の妨げになることが考えられる。いつの時期に、どのような方法で、より効果的に防災教育を行っていくか、来年度に向けて検討が必要である。

## 2. 防災セミナーの受講効果

防災セミナーの受講効果に関する質問は、7項目実施した。9号館で災害が起こった際の避難場所の理解に関する設問では、セミナー前から知っていたものは学生3名(4.9%)、教員4名(40.0%)、防災セミナー後に知ったものは、学生44名(72.1%)、教員6名(60.0%)、今でもわからないものは、学生11名(18.0%)、教員0名、無回答は学生3名(4.9%)であった。防災セミナー参加者のほとんどが防災セミナー参加後に避難場所の理解ができており、防災セミナーの受講効果がうかがえる結果となった。一方で、防災セミナー受講後でも災害時の避難場所がわからない学生がいたため、後期オリエンテーションの際に、再度、避難場所を具体的に教授し、周知徹底を図った。

防災設備の理解に関する設問では、9号館内の防災施設・設備(防火扉、消火器・消火栓、垂直式救助袋)および避難経路(非常出口の場所)、学内のAED設置場所(3ヶ所)、災害時集合場所について、“防災セミナー前から知っていた”、“防災セミナー後に知った”、“今でもわからない”の3つのうち、あてはまるものを回答させた(表1)。防災セミナー参加者のほとんどが防災セミナー参加後に防災設備等の場所の

理解ができており、防災セミナーの受講効果がうかがえる結果となった。この結果より、今回の防災セミナーの目的である『在校時の避難経路・避難場所を知ることができる』、『学内の防災施設・設備の位置を確認することができる』は十分達成できたものと考えられる。

講義中に地震や火災が起きた際の行動理解に関する設問については、“机の下にもぐり、落下物から身を守る”、“揺れが収まるまで、慌てず周囲の状況を確認する”、“閉じ込められることを防止するために、戸や窓を開けて道を作る”、“避難時は押さない・走らない・しゃべらない”、の4点について、自身がとるべき行動を複数回答可として回答を得た。学生・教員ともに“閉じ込められることを防止するために、戸や窓を開けて道を作る”を選択したものが、学生34人(55.7%)、教員7人(70.0%)と最も低い結果であった。これは、地震が起きた際にとっさに取る行動としては、優先順位が低いと考える。その他の項目については高い数値を示しており、防災セミナーで説明した地震・火災を想定した学内での災害発生時の基本的行動は理解できたと推察される。

今回の防災セミナーが、災害時に役立つと思うかどうかという設問においては、“役に立つ”から“役に立たない”の5段階評価で尋ねた(表2)。学生・教員ともに、防災セミナーが“役に立つ”あるいは“ある程度役に立つ”と回答したものが8割を超えており、災害が起きた際に活

表1. 防災設備の設置場所の理解

n (%)

回答	防火扉		消火器		消火栓		垂直式救助袋		避難誘導シール		AED(3ヶ所)	
	9号館内		9号館内		9号館内		9号館内		9号館内		羽島キャンパス内	
	学生	教員	学生	教員	学生	教員	学生	教員	学生	教員	学生	教員
セミナー前から知っていた	11(18.0)	4(40.0)	18(29.5)	3(30.0)	16(26.2)	3(30.0)	24(39.3)	4(40.0)	2(3.3)	4(40.0)	15(24.6)	2(20.0)
セミナー後に知った	47(77.0)	6(60.0)	40(65.6)	7(70.0)	42(68.9)	7(70.0)	35(57.4)	6(60.0)	56(91.8)	6(60.0)	43(70.5)	8(80.0)
今でもわからない	1(1.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
無回答	2(3.3)	0(0.0)	3(4.9)	0(0.0)	3(4.9)	0(0.0)	2(3.3)	0(0.0)	3(4.9)	0(0.0)	3(4.9)	0(0.0)



用可能な内容であったと考える。今回の防災セミナーの目的のひとつである『学内における災害発生時の行動を理解できる』は、ほぼ達成できたものとする。

防災に関する学内のガイドブックが必要だと思いかどうかという設問に対して、“はい”と答えたものが学生 59 名 (96.7%)、教員 10 名 (100.0%)、“いいえ”と答えたものが学生 2 名 (3.3%)、教員 0 名 (0%) であった。このように災害時に活用できるガイドブックに対する学生・教員の要請は非常に高い結果が示されたが、該当する冊子が存在しない。そこで現在、防災関連ワーキングの活動のひとつとして学生が活用できる防災ガイドブック製作に取り組んでいる。

防災に関する自由記述では、学生 12 名、教員 1 名の記述があった。具体的な内容として、学生は、どのように逃げるのか、どこに逃げるのかなど災害時の具体的な行動のとり方が 5 名、消火器や消火栓の使い方など防災設備などの具体的な使用方法が 4 名、将来起こりうる災害に対する不安が 2 名、看護と関連させた考え方が 1 名であった。教員の記述内容は、本学の備蓄品という学内設備に関するものであった。防災セミナーの感想・意見に関する自由記述では、学生 10 名、教員 2 名の記述があった。内容として、学生は、防災セミナー実施の意義に関するものが 4 名、自分で設備などを確認することの大切さを書いたものが 6 名、防災セミナー実施の楽しさを記載し

たものが 2 名であり、教員は、自分で設備などを確認することの大切さを書いたものが 1 名、防災セミナー企画者へのねぎらいの言葉が 1 名であった。

自由記述の結果より、防災セミナーに参加することで、災害時の具体的な行動のとり方や、防災設備の具体的な使用方法や防災設備の状況を知りたいと関心が高まっている半面、将来起こりうる災害に対する不安も感じたと考えられる。しかし、将来起こりうる災害に対する不安を感じることは、防災に対する動機づけとなり、防災対策への行動化は促進されると思われる。今回の防災セミナーの実施は、防災セミナーを受講することの意味や、防災設備などを自分で確認することの大切さを確認する機会となった。楽しく学べたことは、防災に対する意識や関心の向上にもつながったと考える。自由記述から得た貴重な意見の数々は、今後の活動に活かしていきたい。

### 3. 学生および教員の防災に対する意識

防災に関する質問は、7 項目実施した。今までに災害による被害や危険を感じた経験については、学生、教員ともに地震が最も多く、次いで台風であった。また地域の特徴である河川の氾濫、豪雪と回答したものが若干名いた。しかし、今までに災害による被害や危険を感じたことがないものが学生 38 名 (62.3%)、教員 3 名 (30.0%) であり、回答者の多くが被害や身の危険を感じるような経験をしていないという結果が得られた。

現在、住んでいる地域の災害に対する安全性をどのように感じているかについて、“安全”から“危険”の 5 段階評価で尋ねた。“安全”または“ある程度安全”と回答したものが、学生 30 名 (49.2%)、教員 6 名 (60.0%) であった。“ある程度危険”と回答したものが、学生 26 名 (42.6%)、教員 2 名 (20.2%) であり、“危険”と回答したものは学生、教員ともに皆無であった。このように、学生、教員ともに、回答者の半数近くは自身が住んでいる地域は比較的に安全と

表 2. 防災セミナー受講後の実用性 n (%)

回答	学生	教員
役に立つ	48(78.7)	8(80.0)
ある程度役に立つ	10(16.4)	2(20.0)
どちらともいえない	2(3.3)	0(0.0)
あまり役に立たない	1(1.6)	0(0.0)
役に立たない	0(0.0)	0(0.0)

考え、危険性を強く感じているものは少なかった。

日ごろの防災意識について、“意識している”から“意識していない”の5段階評価で尋ねた。“意識している”または“ある程度意識している”と回答した学生が23名(37.7%)、教員6名(60.0%)であった。“あまり意識していない”または“意識していない”と回答したものが、学生26名(42.6%)、教員1名(10.0%)であった。

災害時に使用する備蓄品については、学生、教員ともに懐中電灯(ろうそくなど)、飲料水、非常食の順で準備していると回答していたが、学生では準備していないものが14名(23.0%)いた。防災意識や災害時の備蓄品に関しては、学生よりも教員の方が、防災に対する備えができており、防災意識が高い傾向にある。

過去の避難訓練の経験、実施場所と時期については、学生では1年前の高校生の時期に、教員は1年前に職場で実施しているものがほとんどであり、避難訓練そのものは受けていることが明らかとなった。

災害時の家族や身近な人との安否確認方法の取り決めとその方法については、安否確認方法の取り決めをしているものが、学生19名(31.1%)、教員6名(60.0%)であった。具体的な安否確認の方法は、学生、教員ともに、携帯電話から電話やメールと公衆電話が最も多く、災害用伝言ダイヤル(171)、災害用ブロードバンド伝言板(Web171)と回答したものは、学生、教員ともに1~2名であった。また、自由記述欄に事前に取り決めた集合場所と記載したものが、学生1名、教員2名であった。災害時、特に大規模災害の際は、携帯電話や公衆電話の使用が困難となる。災害時の連絡手段として、災害用伝言ダイヤル(171)、災害用ブロードバンド伝言板(Web171)を使用することは、非常に有効な手段であるが、今回の調査で、これらを活用しているものは、ごく少数であった。今回の防災セミナーでは、時間の都合上、家族との連絡方法については災害時掲示板の紹介のみ

にとどまったが、被災時に家族の安否を把握できることは、精神的な安寧につながると考える。今後の防災教育では、災害時に家族と連絡を取ることの意義や具体的な連絡方法、設定方法などといった詳細な説明と設定の促しが必要である。

本学の羽島キャンパスが指定緊急避難場所(水害を除く)に指定されていることを知っているかどうかを尋ねたところ、知っているものが学生11名(18.0%)、教員9名(90.0%)であり、本学における災害時の地域支援に対する学生の関心の低さがうかがえる結果となった。

今回の調査では、母集団数が異なるため単純には比較できないが、学生よりも教員の方が、防災に対する備えができており、防災意識が高い傾向があることが明らかとなった。また、学生、教員ともに被災経験が少なく、かつ災害による危険性をあまり感じていないこと、災害時の備蓄品準備や家族との連絡方法の取り決めといった防災に対する備えを行っていないことが示された。以上のことから、自主的な防災行動につながるよう、教育を計画し、実施することが今後の課題である。

#### 4. 安否確認メールのテスト配信

本学の安否確認メールの登録状況は、学生58名(95.1%)、教員8名(80.0%)が安否確認メールに登録していると回答した。防災セミナー終了3日後に、学生に対し、安否確認メールのテスト配信を実施した。結果、1年生63名中、安否確認メールの登録者数60名(95.2%)、返信者41名(返信率65.5%)であった。さらに、安否確認メール返信者41名のうち、返信の内容を間違えた学生が7名、安否確認メールに登録していないアドレスから返信した学生が4名であり、正しく安否確認メールを返信できた学生が30名(47.6%)であった。

毎年、秋学期の防災総合訓練時に行われる他学部の安否確認メールのテスト配信における平成25・26年度の返信率は25%台である。今回の安否確認メールのテスト配信結果は、それと

比較すると高く、防災セミナーを実施した効果であると考えられる。しかし、返信者の内訳をみると、正しく安否確認メールを返信できた学生は30名と過半数を割っている状態であり、学生に周知徹底できたとはいいがたい。そこで、後期オリエンテーション時に資料を用いて、安否確認メールのテスト配信の結果を学生に伝え、再度、正しい安否確認メールの受信設定と返信方法を教授した。

安否確認メールは、大学側が学生の被災状況を把握するためのものである。学生が自身に課せられた責任を的確に果たすといった態度や習慣を身につけることは、社会人として、さらに人間の命を守る看護職を目指す学生にとって必要不可欠である。次回の安否確認のテストメール配信は秋学期の防災総合訓練時である。学生に対する教育効果が現れることを期待したい。

#### おわりに ー今後の活動に向けてー

本学看護学部における災害に関する教育は、始まったばかりである。現在、看護学部防災関連ワーキングでは、看護学部学生の有志を募り、学生の意見を反映した災害時に活用可能な防災ガイドブック製作に取り組んでいる。今回は、教員が防災セミナーを実施した。将来的に、上

級生が下級生を教育するといった本学看護学部の特徴のひとつである縦の連携を持つことで、学生が主体となり、率先して自身と他者の命を守る行動がとれることを目指して、今後の活動を行っていききたい。

#### 謝 辞

調査の趣旨をご理解いただき、貴重なデータを提供くださいました学生・教員の皆様に深く感謝申し上げます。また、学生への安否確認メールのテスト配信に関して、多大なるご協力をいただきました情報センターの江口廣晃様に厚くお礼申し上げます。

なお、本研究は平成27年度岐阜聖徳学園大学研究助成により実施した調査の一部である。

#### 引用文献

内閣府(平成27年6月1日検索)。「防災に関する世論調査」.

[http://survey.gov-online.go.jp/h25/h25-bousai/3\\_chosahyo.html](http://survey.gov-online.go.jp/h25/h25-bousai/3_chosahyo.html)

上田ゆみ子, 林 和枝, 鈴木寛之他 (2013): 看護大学生の災害時対応の実態と対応マニュアルのニーズ, 中部大学生命健康科学研究所紀要, 9, 25-34.